

総天然色記録映画

企画・貯蓄増強中央委員会

# フランスはぶどうの村で

文部省特選

上映時間25分 頒布価格 ￥130,000



## — 解 説 —

フランスは歴史的に農業国で、フランス人の農民気質とか、フランス人は質実だとかケチだとかいうことがよくいわれる。しかし、そのかんじんのフランスの農村の生活は、案外知られていない。

こんどのロケで、私たちが一番感心したのは、農繁期になると都市に出ている若い男女が渡鳥のように村に帰ってきて働く姿である。それがいわゆるバカンスにもなっているのであろう。

フランスの娘たちはかなり自由に振舞っているが、嫁入仕度は沢山のシーツとかナプキンのような実用品と貯金で、それを15、6才から自分で働いてためて行く。幼い子供のしつけも噂にたがわずきびしく、私たち日本人の子供に対する甘さというものが、かえりみられる。

老人が、伝統的な生き方に自信をもってくらしているのもおもしろく、年寄りと若い者とは、つかず離れずにくらしていて、お互いに干渉しない。

このぶどうの村も、近代化への道を進んでいるが、古い生活のよさは残して、時代の変化にあわてる風もなく、ラテン系らしく天性陽気で、生活をたのしんでいる。

株式  
会社

桜映画社

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル  
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

## すべての老人に見せたい映画

東洋大学教授 塚本 哲

画面の一駒一駒が泰西名画と叙情詩によってつづられ、  
いうならば美と詩情の交錯に溢れた芸術作品である。

それはまた美しいばかりでなく、われわれの学ぶべき  
多くの内容を含んでいる。そのなかでも特に強い印象を  
うけた1、2をひろってみよう。

フランス農村は、牧歌的な伝統を損うことなく、あた  
かも清らかでもの静かな小川の流れにも似て、きわめて自然  
に新しい文化のなかに流れこんでいる。つまり人間そ  
れぞれに個性と自主性がある、画一的な流行の虜には  
なっていない。若者は洗濯機を使っても、お婆さん連中  
は昔ながらの共同洗濯場でみんなで洗濯を楽しんでいる。

幼い子どもの躰けはなかなか厳しい。自我の芽生えは  
あってもまだ抵抗の少ない時期に社会人として必要なマ  
ナーを習慣づける。そして成長するにつれて自由と独立  
心を尊重している。

家族のなかで稼働中心力が息子に移っていくと、老人  
はスーブの冷めない距離に別居する。しかし1人になっ  
ても幼い時に躰けられた独立心がものをいって、淋しさ  
や依存心はない。この歳になると、むしろ孤独を楽しん  
でいるかにみえる。

もっとも別居はしていても家族との温かい心のつなが  
りがあるから、依然として農作業を手伝う楽しさと役割  
がある。ただ息子や孫たちには一切干渉しないだけであ  
る。

老人の経験は常に尊重されている。ぶどう酒の味は醸  
造する家それぞれの持ち味があるといわれるが、若者は  
老人の永い経験からそれを学ぶのであろう。そしてそれ  
が伝統の味となって行くのである。

老人は別居して孤独を楽しんでいるが、ときたま古い  
仲間との集合はまた嬉しいことのひとつである。男は男づ  
れでトランプなどのゲームを楽しみ、女は女同志で日な  
たに椅子を持ちだして、次から次へと話の花がさく。しか  
し嫁の悪口などはない。というのは老人は自由活発な若  
者の行動に自らの若き日の姿を想い浮べるからであろう。

息子は親の土地を借りて耕作するが、その場合は必ず  
地代を支払っている。日本の習慣から考えると「がめつ  
い」ようにみえるが、割切ってみれば何でもない当然の  
ことである。変な人情論にからむ「おもわく」がないだ  
けに却ってすっきりしている。そしてその割切りがむし  
ろ親と子の人間関係をよいものにしているのである。

このほか、くめばくむほどつきない味わいがある。

### スタッフ

|      |      |
|------|------|
| 脚本監督 | 村山英治 |
| 撮影   | 江連高元 |
| 同助手  | 田中行  |
| 助監督  | 遠藤明  |
| 編集   | 沼崎梅子 |
| 音楽   | 間宮芳生 |
| 解説   | 川久保潔 |



## 若者にも見せたい作品

農業総合研究所 並木正吉

村で一番若い農夫のブルジャン君は、熱心なクリス  
チャンで、ぶどう作りを神の道にかなったものとして、  
仕事にはげんでいる。若い妻と赤ん坊をあやすときの顔  
や仕事に出て行くときの顔の汚れのなさ、みちたいた  
表情は、ミレーの名画「晩鐘」の農夫を思わせる。「晩  
鐘」は今でもルーブル博物館で「モナ・リザ」とともに、  
多くの人に親しまれているが、この映画に出てくる農夫  
達は、ブルジャン君をはじめ、ピエールもモリソーも、  
農業を自分の「天職」として、それに安じている面がみ  
られ、さすが「晩鐘」を産んだ国柄を感じさせる。

もちろん、農業をやる若もの達がいなくなっているの  
は、フランスも同じだし、夜中までダンスパーティに興  
じたり、教会をデートの場所として利用したり、新らし  
い波は、農村のすみずみに及んでいる。しかし青年はそ  
のダンスパーティの翌日は早くから畑に出ており、娘さ  
ん達も、結婚準備のため、レース、枕カバー、ナブキン  
などを自分でつくる堅実さを失っていない。

フランスでは、戦後、アメリカからの援助（マーシャ  
ル・プラン）もあって、機械化が普及した。しかし、こ  
の映画でよく示されているように隣りが買ったから自分  
も買うという見栄は少ないようである。馬車も堂々とゆ  
ききしている。わが道をゆくというこの様子は、どうも  
農業についての自信と無関係でなさそうである。

新旧2つの世代の生き方にも、長い経験からの知恵を  
感じる。……

また、ぶどうの刈り取り時期には、遠い親戚からの労  
働力を集めるが、都会につとめている若ものも兵隊も、み  
な休暇をとって村にもどってくる。この点は、今後日本  
でも参考になるかも知れない。週休2日制とか、長期休  
暇がふえてゆくのは、大きな時代の傾向だが、問題はそ  
のつかい方である。ムダ花のように、レジャーだけとい  
うのは、西欧にもないようである。